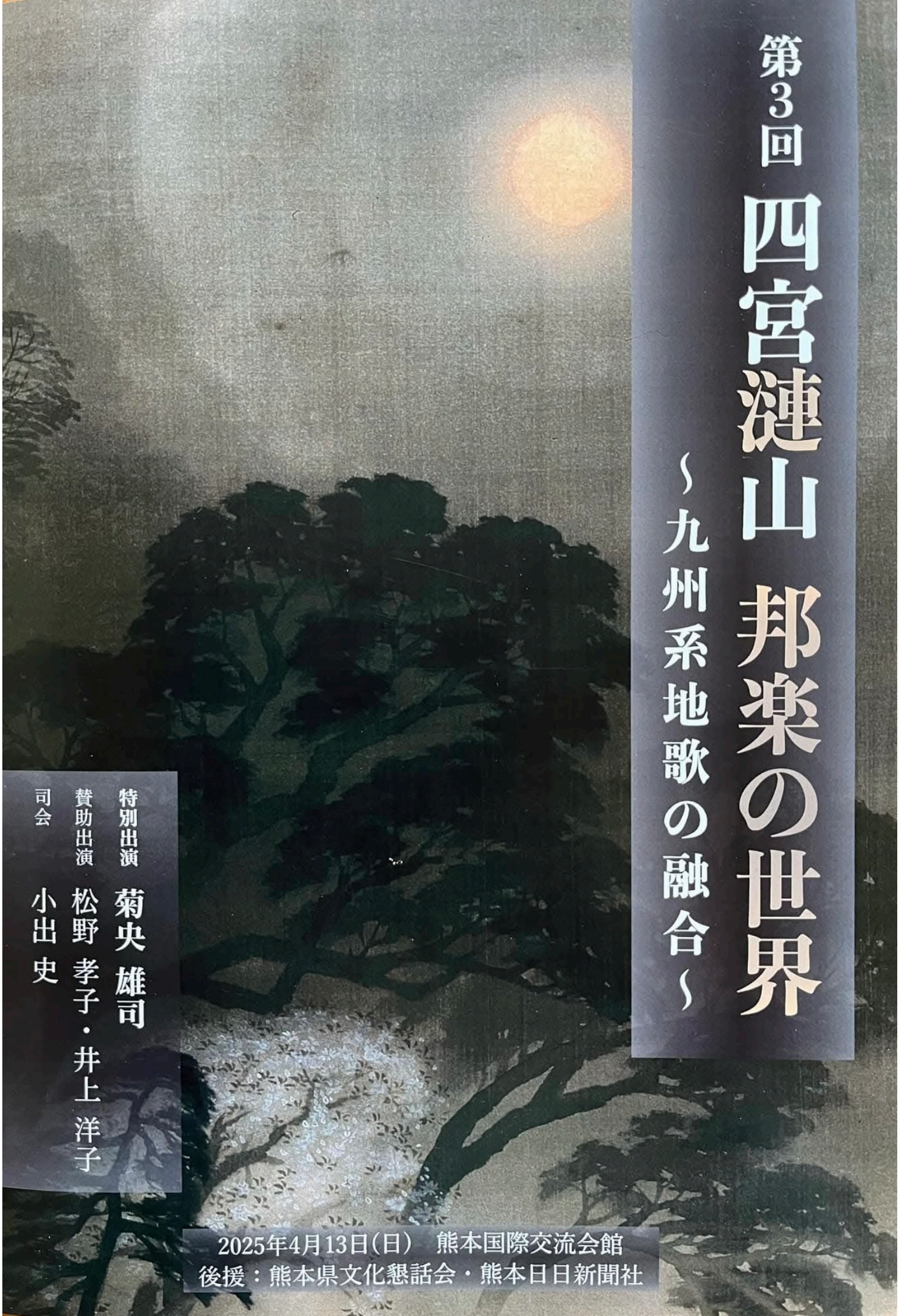

# 第3回 四宮漣山 邦楽の世界

## ～九州系地歌の融合～

特別出演　菊央 雄司

賛助出演　松野 孝子・井上 洋子

司会　小出 史

2025年4月13日(日)　熊本国際交流会館

後援：熊本県文化懇話会・熊本日日新聞社

## 上方地歌『吾妻獅子』　峰崎勾当 作曲

歌・三絃本手 松野孝子 井上洋子　歌・三絃替手 菊央雄司　尺八　四宮漣山

【歌詞】

昔より言ひ慣わせし　東下りのまめ男　慕ふ旅路や　松枝の　富士の高嶺に白妙の
花の姿に吉原詰り　君が身に添う牡丹に馴れて　おのが富貴を花とのみ　弥猛心も憎からず
想ひ想ふ千代までも　情けに交わ(かざ)す後朝の　糸竹に　心乱れ髪　歌ふ恋路に　露添う
春も呉竹の　かざす扇に写す曲
(手事)
華やかに乱れ乱るる妹背の道に　獅子も遊びて　幾代まで　変わらぬ世(色)こそ　めでたけれ

【現代語訳】

昔から「伊勢物語」の主人公が都落ちする事でお馴染みの、東下りの「まめ男(真面目な男)」を敬慕する旅路で、男が江戸へと旅をします。その男を、松の枝ではありませんが待つ遊女がいます。
富士の高嶺に降る雪ほどに白い、花の様な彼女は、その容姿に加え、吉原詰りを話します。
我が身に備わる牡丹の如き美貌に、彼女は天狗になり、自分が富んで貴い事を栄誉とばかり思いこみます。そんな尊大な彼女の心も、男は憎からず思います。
二人は互いに重い合います。千代までも続きそうな位に。
恋心から愛の言葉を交わし合い、翌朝奏でる音楽に、奏する彼女の心も乱れます。彼女が恋の道を歌っている内に、露がちだった春も暮れ、今では呉竹で作った扇をかざし、曲に合わせて舞うのです。
華やかに心乱れ合う男女の恋の道です。そこに、獅子舞の獅子も舞出ます。幾代までも華やかさの変わらない男女の仲とは、何と芽出度いものですね。

四宮漣山　〒865-0061 玉名市立願寺1177-1
Mail: renzan1124@gmail.com　☎090-3486-5795

# 主催者挨拶

四宮漣山

熊本玉名に移り住まい早5年が過ぎました。
高校卒業迄の18年間の田浦住まいは、熊本の事を本当に何も知らないで過ごしていたのだと、今にして思う毎日です。
お陰様でこの5年間は一生懸命に沢山の人達と繋がり、尺八ひいては邦楽の伝統音楽を広めたいの思いで活動して参りましたが、一緒に合奏勉強する仲間や足繁くコンサートにお運び下さりご支援を下さる方々が少しずつ増えて喜んでおります。
今日もそんな方々のご声援でこの様な会を開催出来ました事に深く感謝申し上げます。
芸事に終わりは無いと申しますが、尺八を始めて早50数年まだまだ至らない事だらけで御座いますが、幸いにもこの歳になっても芸を極めたいの思いはますます募り、尺八を吹く為の基本の体力を落とさない様にする為の努力は欠かさず続けております。
本日も遠路大阪から菊央さんがご出演下さり嬉しく有り難い限りです、きっと素晴らしい地歌で皆様に伝統音楽の世界に誘って下さる事と思います。
又、熊本の九州系地歌の奏者お二人共、日頃研鑽を重ねた演奏を披露出来ればと張り切っておられます。
今日ご来場の皆様には日頃の喧騒から離れて、日本古来の音楽に耳を傾けて心静かなひと時をお過ごし頂ける様私達の精一杯の演奏でお応えしたいと思います。
本日はありがとうございました。

## 都山流本曲『峰の月』　流祖 中尾都山 作曲

**尺八独奏 四宮漣山**

伊勢錫杖ヶ岳に登る十四夜の月。
錫杖ヶ岳の稜線に仄かに月の出を告げ漸次明るさを増し勇然と登る月光。
下界を照らし川面に映える情景を一管に託す。
尺八の独特の奏法ユリを多く使って、情景に合わせてユリの様々な奏法で表現する。

## 九州系地歌『園の秋』　菊岡検校 作曲

**歌・三絃本手 松野孝子　三絃地 井上洋子　尺八 四宮漣山**

京都島原に実際にあった、「桔梗屋」という、遊女を呼んで遊ぶ揚屋の庭が舞台である。
歌の初めは、「高級遊女たちは、みな他の席に出払ってしまい、残っているのは露のような残り物の遊女ばかり。今は出払っているので、後で借りましょうか…」という内容で始まる。
歌詞にある「貸しに出て」とは遊女が雇われて出てしまうことで、反対に「かるかや＝借る」は客が太夫を選ぶことを意味する。
この「桔梗屋」の庭に咲く、「苅萱・尾花(すすきのこと)・女郎花・鳥兜・萩・薄」など、秋の草花七種を遊女として次々に詠み込みながら、掛詞や縁語を見事に連ねて、情趣あふれる廓の情景をうたっている。例えば、「女郎花」からは、謡曲「女郎花」の主人公の小野頼風が、妻の墓に咲く女郎花を見て憐れみ、自分も後を追って身投げするという物語も掛けて歌っている。
後唄は、遊女が朝顔の様に手を絡ませることに始まり、やがて、視線を上にあげて、「遠景の空一面に秋の七草が匂うようだ」と、心に残る締めくくりを演出している。
三絃は三下りで、小さい曲のわりには微妙なツボが多く、箏は演奏中に何度も調子替えがあり、尺八共々、演奏には難しい所が多いが、歌詞に見合ったイキな曲となっている。

【歌詞】
たゆふすは　皆かしにいで　露ばかり　あとに苅萱　桔梗屋の　その庭面も　秋くれば
時に尾花や女郎花　廓景色と打ちつれて　しゃんと小褄を烏兜　おのの頼風寄り添ひて
咲き乱れたる萩薄
(手事)
その手にからむ朝顔の　東雲方の朝嵐　空も匂ふか　秋の七草

## 宮城箏曲『比良』　宮城道雄 作曲　平兼盛 作詞

**歌・三絃 菊央雄司　箏 井上洋子　尺八 四宮漣山**

大正12年(1923年)作曲。
従来の三曲合奏は普通、まず三絃を伴奏にして唄を歌う地歌があり、それに箏の替手が付いていた。
これに尺八が加わったのは明治以降で、尺八はだいたい三絃と同じ旋律が付けられた。
作曲者宮城道は、このような三曲合奏を改革し、箏、三絃、尺八がそれぞれ独立の旋律を演奏する三曲合奏の形式を創作した。その一つがこの曲である。
古い和歌を歌詞に選んで、三曲合奏形式の手事物に作曲したものである。

【歌詞】
見渡せば　比良の高根に　雪消えて
若菜摘むべく　野はなりにけり
(手事)
若菜摘むべく　野はなりにけり

## 地歌作物『蛙』　作者不詳

**歌・三絃 菊央雄司**

地歌のなかでも作物というジャンルに分類される曲です。作物はイソップ童話のように物語があり、擬人化した動物、鼠や狸、カラス、蛙や蛇などが出てきます。
この曲の主人公は蛙です。
ある暑い夏のある日のこと、草むらから命からがら一匹の蛙が出てきます。一息つくまもなく後ろからクチナワ、つまり蛇に襲われそうになります。とっさに嘘をついて、難を逃れるという内容です。

【歌詞】
水無月頃の昼　畑に来て見れば　茄子夕顔白瓜冬瓜　汗を流して暑さを凌ぐ
かかるところへ草叢より　蛙一匹逃げ出て　さてさてひやいや危ういことと
天の命を拾いしと　喜ぶ後よりざわざわざわ
草押し分けて蛇が　鎌首盛っ立て　盛っ立て　舌をぴらつき飛びかかれば
蛙は驚き飛び退り　たった一言聞いて給べ　わしが親父を烏に捕られ　どうぞ敵が取りたいと
一家一類相談半ば　それをお前に呑まれては　かかる望みも水の泡
哀れと思うて蛇さん　どうぞ助けて給われと　雨を呼ぶより声高く　泣くより　他の事ぞなき
ことわり聞いて蛇も　おれが倅も鳶にかけられ　世には似たことあるものと　ぞろりぞろりと立ち帰る
あと見送りて蛙はことことうち笑い　彼奴をまんまと謀りしは　口は調法なるものと　傍の溝へ飛んで入る